

2016年9月14日

2016年8月 Nr. 426

今回は、第二の人生を大都市ベルリンに移り住んで送っている年配女性たちがテーマです。放送と課題では、そうした2人の女性の事例がその背景や放送当時の状況と共に紹介されています。

まず一人目は、ゾークムント Siegmund さんという67歳の女性です。彼女はデュッセルドルフに程近いヒルデン Hilden という小さな街で50年間を過ごした後、住んでいたテラスハウスを売却し、ベルリンに引っ越しました。そのベルリンには27年前既に、彼女の娘ベッティーナ Bettina さん（放送当時45歳前後？）が移り住んでいました。今度は母親のゾークムントさんが娘のベッティーナさんのいる所に移り住んで来たというわけです。一方、ベッティーナさんは男友達と一緒に住みたいと思っていましたが、そのベルリンの90㎡の古い住居はそれには小さ過ぎますし、彼女の19歳の息子フリッツ Fritz がベッティーナさんのところにまだ同居している上に、彼女の男友達にもまた息子が1人います。母親のベルリン引っ越し計画は彼女にとっても好都合でした。そこで、ベッティーナさんこれを機会にもっと大きな住宅を購入し、自分たちが住んでいた住居は母親のゾークムントさんに明け渡しました。

さて、ゾークムントさんが売却した家は、彼女が50年前（1965年、17歳？の時）両親と一緒に移り住んだものでした。ゾークムントさんが結婚したとき、両親はゾークムントさん夫婦に2階部分を使わせ、1階部分だけを自分たちで使っていました。彼女は、そこで娘ベッティーナさんを儲けましたが、そこで27年前（1988年）に夫も亡くなりました。当時彼女はまだ40歳の若さでした。そこでしばらくの間不動産仲介業の事務所も構えていました。ゾークムントさんが一戸建て住宅付きの自分の土地を売却して得た資金の一部分を彼女の娘ベッティーナさんは、自分用の新築の住居を購入するのに充当したということです。

ゾークムントさんがベルリンにやって来る2、3週間前（2015年2月）に、ベッティーナさんは購入した新しい住居に移りましたが、ゾークムントさんが引き継いだ娘の旧住居の洋服ダンスには娘の衣類がまだ置かれ、食料貯蔵庫も空になっていませんでしたので、ゾークムントさんは腹を立てました。娘がベルリンに引っ越して以来、27年間、この親子は同じ街に住んだことはありませんでした。今後は彼女たちは互いにまたこれに慣れる必要があります。ゾークムントさんの住まいとベッティーナさんの住居は、自転車ですら5分で行ける距離ですし、歩いて10分位です。

ある土曜日の午前中、ズィークムントさんはベッティーナさんとあるカフェでコーヒーを飲む約束をしました。ズィークムントさんは娘が自分の工房で自ら製作しているアクセサリーを販売している店の前に自転車を止めます。娘を迎えに行くためにです。そのカフェで娘と朝食を取った後、彼女は市場に行きます。しかしながらベッティーナさんにはやらなければならない事があります。イヤリング 1 ペアを仕上げなければならないのです。そこで母親に市場での買い物を頼むことになります・・・。

ベルリンに移り住んでから 3 ヶ月経過しましたが、ズィークムントさんは、快適さを感じているようです。彼女にはこの大都市の雰囲気が入っています。

二人目は、もう 2 年前の 73 歳の時、シュヴァルツヴァルトの小さな街ショップフハイム Schopfheim からベルリンに移り住んだラップ Rapp さんです。彼女が住んでいたその街で夫は教師をしていました。夫妻はそこで 40 年以上も生活し、4 人の子供を育て上げました。この土地は子供を育てながらの家庭生活には理想的でしたが、彼女には別の人生・生活が待っているような気がしていました。彼女のベルリンの住まいは、自分でインターネットで探したものでした。

ラップさんの 4 人の子供達の内 2 人もベルリンにいますが、彼女とは別の市区に住んでいます。ラップさんの孫は 3 人。男の子は 4 歳で、女の子は 2 歳と 8 ヶ月の 2 人です。時々その孫達を家に連れて来ます。その孫たちのためにラップさんは子供用の椅子やおもちゃさえ買い揃えていました。孫たちが自分の住まいで心地よく感じてもらえるようにとの配慮からでした。また、ラップさんはベルリンにやって来たとき、何か楽器の演奏、外国語それにヨガなどを習いたいと思っていました。しかしながら、最初の 2 年間にはまだそれを実現するには至ってはいないとのことでした。

娘のレギーネ Regine さんは芸術・美術史家であり、美術館・博物館でガイドをしています。ラップさんも時々、美術館・博物館と一緒に出かけます。ラップさんも展覧会に興味があるという理由もありますが、時折娘がガイドする間 8 ヶ月の孫娘の世話をするためだけに出かけるということもあるといいます。ラップさんは 20 年間もレギーネさんと同じ街には住んでいませんでした。今後ラップさんは、4 人の子供の内 2 人が住んでいる場所、ここベルリンで歳を重ねるでしょう。その結果、2 人の子供たち（レギーネさんと以下のヨハネスさん）がラップさんを支援することが可能となります。

ラップさんの息子ヨハネス Johannes さんには、息子と娘が一人ずつ（上記の 4 歳と 2 歳の子）います。ヨハネスさんは子供達がこの年齢の時祖母であるラップさんと一緒に

多くの時間いられることはとても素晴らしいと思っています。というのは、経験、知識
それにある程度の冷静さを備えた祖母の世代は、多くのことを孫たちに伝えることが可
能であると考えているからです。

さて、今回紹介された 2 人の年配女性は共に、小さな街に長く暮らし子育てを終えている
こと、夫を亡くしていること、これから大都市での第二の人生もエンジョイしてみたいと
思っていること、そしてその子や孫が既に長くベルリンで生活に基盤を持っていること
・・・などの共通点があります。そのような年配女性にとっては、ベルリンは魅力的な
のだらうと思いますが、平均的なドイツ人の場合（日本人の私が想像することには限界が
ありますが、敢えて想像した場合ですが）、彼女たちと似た環境に置かれても、彼女たちと
考えを共有するドイツ人は少数派なのではないかと思います。やはり年配者にとっては、
一般的に言って、今まで培ってきた人間関係を断ち切って大都市で新しい生活を始めるこ
とはリスクが大きいと考える傾向にあるのではないかと想像します。

また、放送から 1 年以上経過している彼女たちの近況はどうなっているのか興味がありま
す。ズィークムントさんは当時まだ、ベルリンでの生活が 3 ヶ月程でしかありませんでし
たが、現在は更に 1 年以上経過しています。彼女は引き続き娘のベッティーナさんとの程
よい距離を保ちながら快適に生活しているのでしょうか。また、当時ベルリンの生活が既に 2
年経過していたラップさんは現在は何か習い事をスタートしているのでしょうか。彼女た
ちの「その後」が気になるところです。彼女たちが大都市ベルリンでの第二の人生を謳歌
できていればと思います。

ところで、6 月 (Nr. 424) の課題において、再統一後の 15 年間でベルリンの人口はその
約半数が入れ替わったことが話題になっていましたが、時期はずれるものの彼女たちも流
入人口の内の少なくとも 2 人ということになります。彼女たちのように第二の人生をベル
リンで謳歌しようとする年配女性の流入人口は実際どれ位の数だったのでしょうか。50 代
～70 代の女性の人口動態統計である程度把握できるのではないかと思います。数千人単位
ではないかもしれませんが、数十人という少ない人数ではないような気がします。ひょっ
うとしたら数百人単位ではいるかもしれません。少なくとも同様のことを実行した年配男
性よりは多いような気がします・・・。

K. K.

2016年10月20日

2016年9月 Nr. 427

今回は、Helgoland（ヘルゴラント島）が話題になっています。西部ドイツ放送（Westdeutscher Rundfunk, 略して WDR）で毎朝放送されている 15 分間の番組（„Zeitzeichen“）は、その日に起きた歴史上の何らかの出来事を話題にします。今回の放送は 2015 年 8 月 9 日のものでしたが、125 年前、すなわち 1890 年、その年の 8 月 9 日にヘルゴラント島が英国からドイツに譲渡されたことから、番組ではヘルゴラント島がテーマになりました。

さて、ヘルゴラント島は、エルベ川が北海に注ぐ地点から北西 60 キロメートル程のところの北海に位置しています。既に 14 世紀には、この島は海賊にとって大きな戦略的な意味がありました。ヘルゴラント島は、1807 年に英国に占領され、英国の植民地になるまでは、時にはドイツ領、また時にはデンマーク領でした。しかしながら、その住民は、英語ではなく、引き続きドイツ語とヘルゴラントのフリース語を話していました。1826 年、この島を海水浴場に改装することがスタートしました。夏の暑さを避けたいと思う大都市の人々が、避暑にやって来て、ヘルゴラント島民の個人の宿泊施設の部屋を借りるようになりました。

多くの芸術家たちがこの島で夏を過ごしましたが、その中にはハインリヒ・ハイネ（Heinrich Heine）やホフマン・フォン・ファラーズレーベン（Hoffmann von Fallersleben）もいたとのこと。1841 年、現在のドイツ国家の元になる詞がヘルゴラント島においてヨゼフ・ハイドンのメロディーに合わせてホフマン・フォン・ファラーズレーベンの手により生まれました（2016 年 8 月 26 日の „Zeitzeichen“ では 1841 年 8 月 26 日に彼がこの詩を書いたことが紹介されていたようです）。当時ドイツはまだ存在していませんでした。ドイツ国家の神聖ローマ帝国は 1806 年以來もはや存在していなかったからです。ホフマン・フォン・ファラーズレーベンは、ドイツ人にとってはドイツがすべての上にあるべきであると考えました。1871 年、ビスマルクはオーストリア抜きドイツ第二帝国を樹立しました。しかしながら、1922 年になってようやく、このドイツ国歌は、社会民主主義の帝国大統領フリードリヒ・エーベルト（Friedrich Ebert）により国歌であることが宣言されました。この歌は、その後もいわゆるドイツ第三帝国においても終戦までそうあり続け、1952 年、諸事情により 3 番が 1949 年樹立のドイツ連邦共和国の国歌となりました。

皇帝ヴィルヘルム 2 世は、ドイツ艦隊を強化し、ヘルゴラント島に戦略・軍事基地を建設

することを望んでいました。しかし、東アフリカの植民地における領土問題に関する長い交渉を経てようやく、1890年ついに英国はこの島をドイツ帝国に譲渡する準備が調ったと考えました。そして、民間施設のみならず、軍事面でも多くの建設がなされました。ヘルゴラント島は、大きなホテル、室内プール付きの公衆浴場、保養センター（Kurhaus）、屋外音楽堂、郵便局そして北海博物館（Nordsee-Museum）などを備えた高級海水浴場となりました。1911年には劇場さえも建設されました。一方、島の南端は軍事施設を建設するためにくり抜き工事が行われ、そこには地下の病院、給食センターそしてUボート用の弾薬庫などがありました・・・。

低地部分には、ヴィルヘルム2世は、船舶が停泊できるような大きな突堤を海の中に向かって建設させました。そこでは、満潮時に突堤まで行った船舶は、干潮時には事実上砂浜上に停泊し、その間に、火砲やコンクリートをクレーンにより荷下ろしをしました。砂浜上に板を敷き、すべて袋に詰め船舶から背負って運び出し、高台に持って来ることができました・・・。

大きな船舶にとっては接岸できるような上陸用栈橋は未だにずっと存在しません。従って、小さい舟ならば旅行者達はほとんどどこでも下船できますが、大きな船舶からは旅行者達はボートを使って陸地に連れて行かれます。旅行者達にはこれはヘルゴラント島への日帰りツアーのアトラクションの一部でもあるようです。普段この小型船の仕事のないときは大きなタンカーを運航しているある船長にとっては、時にそのような小型船を操縦することはまた楽しみでもあるとのことでした。

ところで、私にとって、ヘルゴラント島といえば、写真付きのドイツ語教科書または参考書では大抵、その海岸の砂浜または椅子で日光浴しながら寛ぐ海水浴客を目にしていたという記憶があります。ヘルゴラント島にはそのくらいのイメージしかありませんでしたので、今回の放送および課題では今まで知らなかったヘルゴラント島の歴史や意外な側面を知ることができました。英国から譲渡されたことは知りませんでした。しかも、この交渉にはアフリカの植民地権益が絡んでいたことも改めて知りました。

また、現在のドイツの国歌は、ハイドンのメロディに、ホフマン・フォン・ファラーズレーベンが詞を書いたとことにより完成したということは聞いていましたが、それがこのヘルゴラント島でなされたということは私には新鮮な驚きでした。現在のドイツ国歌の原型は既に1841年につくられ、1922年に国歌として宣言されたといえますから、非常に長い歴史を有するものだと思います。一方、日本の国歌「君が代」については迂闊にも歴史を知らなかったため、今回調べてみましたところ、詞は古今和歌集（10世紀初め編纂）から取られたことは承知しておりましたが、曲は1880年以降事実上国歌として扱われ（やはり

意外に長い歴史があります)、1999年に正式に法制化されました。因みに、正確な情報かどうか定かではありませんが、1903年にドイツで行われた「世界国歌コンクール」で、「君が代」が一等を受賞したことが Wikipedia には記載されています。事実だとすれば大変興味深いことだと思います。

さらに、かのホフマン・フォン・ファラースレーベンは、正式にはアウグスト・ハインリヒ・ホフマン・フォン・ファラースレーベンという、非常に長い名前の持ち主だったことも初めて知りました。これを今回知ったときは、「何とも長い名前だ」、「貴族階級の出身なんだ」と思いました。ところが、後者に関しては正しくはないようです。Wikipedia には、姓が「ホフマン」というありふれたものなので、別の家系と区別するため出身地名の「ヴォルフスブルク・ファラースレーベン」の一部を姓の後ろに付けて名乗っていたためであるという説明が掲載されています。この説明が本当だとすると、「フォン」付き名字が必ずしも貴族出身を示さないということになりますが、このことも今回初めて知りました。かつてドイツの子会社勤務時代の同僚に von Gans さんという方がいましたが、彼の場合はどうだったのだろうかと思い出しました。今では確認のしようがありませんが、彼の場合、von Gans の前に姓はありませんでしたので、先祖はやはり貴族階級だったのかもしれませんが。当時彼に尋ねておけば良かったと思います。

K. K.

2016年11月20日

2016年10月 Nr. 428

今回は、ドイツにおけるチップ・心づけ (Trinkgeld) が話題になっています。

例えば、レストランではチップとしてどのくらいの金額を払うべきかを言うことは、ドイツにおいてもなかなか難しいということです。従って、2, 30 年前からすでにドイツやフランスでは付加価値税と同様、そのサービスのための金額も請求書に記載されています (因みにドイツでは大抵 10% ということです)。

しかしながら、それにも関わらず、殆どのお客は請求書に記載されている金額のサービス料金に加えて、ウェイターに対しチップをも渡しています。ところが、これは多くの人には愉快なことではないとも言えるようです。なぜならば、お客としての彼らは、チップを渡すウェイターに対し同じ目線で接していないという感情を抱くからです。犬は、飼い主 (男女を問わず) の方を見上げ、人は犬、動物に対し見下ろす形になります。しかし、人は他の人間を見下ろしたくはありませんし、他の人が自分を見上げたり (仰ぎ見たり) することは望みません。

ウェイターがチップに対し過度に (?) 感謝したり、負い目を感じなくて済むように (言い換えれば、ウェイターはサービス提供者であっても、召使いではないということでしょうか)、イタリアでは、またしばしばフランスでもレストランを出るときに、チップをさりげなくテーブルに置いたままにしておきます。すると、ウェイターは、お客がお金をそこに忘れたのではなく、そのチップが自分のために置いてくれたことを知るわけです。

ドイツの美容院では大抵、チップを入れられる小箱が置いてあります。しかしながら、チップを入れるその小箱のお金はその美容室で働いているすべての人で分けあう一方で、感謝をしていることを示すために他の美容師ではなく正に自分の担当美容師の仕事着のポケットにチップを入れたがる女性客も少なくないとのこと。

多くのレストランでもまた、ウェイターがもらったチップを独り占めにしないのが一般的のようです。午前 11 時から午後 3 時までランチが食べられるベルリンのあるレストランのウェイトレスは、もらったチップを一つにまとめ、後で皆で分け合うということを語っていました。チップをそこで分け合うわけですが、恐らくウェイターとウェイトレスだけではなく、料理人も含めて分けているだろうと思われれます。というのは、料理の味が良いと感じたお客はより多くのチップを弾みますが、その料理がお客にとって味が良かったこと

に対しては、ウェイターは何もできたわけではないからです。料理の味は、料理をする料理人次第だからです。

お客が特に快適と感じる場所では、より多くのチップを渡すことがあります。あるテーブルはお客の間でより好まれます。例えば、庭を眺められるとか、レストラン沿いの通りを行き交う人々を眺められたりする窓際のテーブルなどです。お客を全員で給仕するレストランでは、それはウェイター達にとって重要ではありません。しかし、多くのレストランでは、どのウェイターにも自分の受け持ち区域（担当テーブル）があります。どのウェイターも、自分がどのテーブルを担当しているかは知っていますが、お客はそれを知らないことが多いです。そこで、ちょうど通りかかったウェイターに何か注文しようとする、「同僚がすぐ参りますので」と言い、そのテーブルが属している受け持ちの同僚ウェイターを呼んでくれます。無愛想なお客に対しては、これまた礼儀知らずのウェイターがこう答えることがあります。「このテーブルは私の受け持ちではありません！」

誰が一番好まれるテーブルを担当するかについて争う代わりに、ウェイターたちはもらったチップを一つにまとめ、彼らがみんなで分け合いたいと考えています。ウェイターに対するチップとしてはしばしば、ウェイターがお客に渡すその釣り銭を充てます。しかし、例えば、19.70ユーロの請求金額に対し20ユーロ紙幣を使うと、30セントを釣り銭として受け取ることとなりますが、この釣り銭の30セントをチップとして渡すことはとても礼儀知らず（マナー違反）になってしまうだろうということです。このような時は、50セントを追加して渡すか、この30セントを釣り銭として受け取った上で、改めて1または2ユーロを渡すことが良いようです。

お客がチップとしてどのくらいの金額を差し出すだろうかということについては、専門の職業訓練を受けたウェイトレスでも予想することは難しいということです。チップをもらうことはまずあるまいと思ったお客から代金の10%も受け取ることがある一方で、特にうまが合って好印象を受けた他のお客からは、釣り銭が20セントだけの場合でもその釣り銭きっちりの金額しかもらえないという具合です・・・。

ところで、大分昔の私のドイツ滞在中（1986年12月～1991年1月）の経験を振り返ってみますと、レストランでも、タクシーでも多めにチップを渡していたと思います。私に限らず、当時の日本人駐在者は多めに渡していたようです。しかしながら、日本人経営の寿司店や料理店では、ウェイターとウェイトレスに対してテーブルで支払いをするのではなく、店を出る際に最後にレジで（an der Kasse）支払うため、チップは支払っていなかったように記憶しています。また、散髪については、私は日本人経営の店に通っていたので、請求金額のみの支払いしかせず、チップを渡したことはありませんでした。ホ

テルでは、荷物を運んでくれたボーイにはチップを渡していました。また、駅などの公衆トイレで小皿にチップを置くことに当初は戸惑いを感じましたが、慣れるにつれてこれによりトイレが常に清潔に保たれるのであれば、むしろ好ましい慣習だと思うようになりました。全体としては、最初の内はチップの習慣に対し戸惑いを感じましたが、時間がたつにつれ徐々に慣れて行ったのではないかと思います。

さて、現在の日本では飲食店でチップを渡すことは一般的ではないように思いますが、比較的高級なレストランでは予めメニューや請求書・領収書に10%程度のサービス料が課せられる旨の記載があることが多いようです。日本ではこれに追加してチップを渡す客は、ドイツと異なり少数派ではないかと思います。日本では普通、個々のウェイターやウェイトレスが特定のテーブルを担当していませんし、上記（ドイツの日本料理店での支払い）で触れましたように、支払いも店を出る時に各テーブルではなく出入り口に近いレジで行いますので、個々のウェイターやウェイトレスにチップを渡す仕組みになっていないこともチップを渡す習慣がないことにつながっているのかもしれませんが。また、逆にチップを渡す習慣がないために、そのような支払いの仕組みになっているのかもしれませんが。

私自身ここ10年以上は、ドイツは言うまでもなく在職中の出張や個人的な旅行などで海外へはどこへも出かけておりませんので、ドイツだけでなく海外各国のチップ事情には全く不案内です。万一旅行でドイツへ行く機会があった場合には、最初はまたチップで戸惑うのではないかと思います。

さて、チップに関してこのような番組がドイツで放送されるということは、チップの習慣があるドイツにおいても、時には客がチップで頭を悩ませることがあるからではないかと思いました。また、一方店側からの視点で見ても、ベルリンのベテランウェイトレスが語っていたように、客からのチップの金額を予想することは難しいということです。今回のテーマを通して、私は「たかがチップ、されどチップ」という印象を持ちました。

K. K.

2016年12月17日

2016年11月 Nr. 429

今回は、ドイツにおけるホームパーティー形式での販売会（Verkaufsparty）が話題になっています。

直販というのは、販売者が店舗を有さない、つまりお客さんが店舗に来ることができず、販売者がお客さんのところに来る販売方式のことを言いますが、ドイツでは特によく知られているのが電気掃除機のセールスマンということです。彼らは、自ら家を個別訪問し、掃除機のデモンストレーションをします。しかしながら、人は電気掃除機のセールスマンが掃除機をかける様子を一人で眺めるという販売形態で買うよりも、他の人と一緒に集まって買い物をすることのほうが、もっと楽しいと感じます。

特に多くの時間一人でいる年金生活者たち、それに女性たちは、少グループで共同体験しながらの物品の購入を高く評価しています。多くの人は、商品を生産者から直接手に入れられれば、お金を節約できるとも考えますが、それらは自社の商品を直販でしか販売していない会社がほとんどですので、実際はその商品が特別買い得であるかどうか見分けがつかないことが多いわけです。どこか他の場所で見える類似の商品と比較することは困難です。そして、人にとってあるものがかなり高いと思える場合でも、その商品は特別に価値の高い商品であると販売員からささやかれて納得するというわけです。そして特に主婦たちは、殊の外ほとんど商店がないようなひとけのない地域における、パーティー形式の販売会に好んで訪れます。

インターネット経由で何かを注文し、自宅まで配達してもらうことはとても便利ですが、そこには多くの人にとっては共同購入のときに有する購入体験が欠けているといえます。またデパートでは確かに多くの人が同時に買い物をしますが、ホームパーティー形式の商品販売会で経験したような共同的なもの、みんなで一緒にというものではありません。

このような直販で働く人は大抵、企業に雇用されておらず、その仕事をフリーランスとして、つまり独立形式で行っています。この働き方では、自分の好きなように自分の時間をうまく配分することができ、また好きなように休暇を取得できます。

サプリメントまたは化粧品が販売される場所では、その販売員たちは、相談相手（コンサルタント）と呼ばれます。お客さんは、自分がそのような商品を買う前に、アドバイ

スを受けたいのです。相談相手（コンサルタント）は時々、見本市やデパートでブースを設けますが、彼らにとってより楽しいのは、ホームパーティー形式の販売会です。そこではある女性が、友人、知り合いおよびその知り合いの知人を家に招待します。すると彼らにすべてを説明するために、相談相手（コンサルタント）がやって来ます。これはその客を迎える側の女性（Gastgeberin）には楽しいことです。その上その女性がただでもらえるものがあります。

例えば、放送で紹介されているフリッツ夫妻は、ホームパーティー形式の販売会だけでなく、見本市やデパートのブースでアクセサリを販売しています。しかしながら、彼らには二人とも本業があります。夫はフリーランスでITの専門家として働き、妻はフリーの美容師です。二人とも旅行好きで、ドイツ中をあちこち回るのが好きです。しかしながら、この夫妻は好きだからという理由だけでアクセサリの直販を行っているわけではなく、実は彼らは働かなければならない事情があるといわれています。というのは、負債の返済のために多くの金を稼がなければならないからです。2戸建て住宅の半分を改築してくれた建築施工業者が破産し、その業者がまだ夫妻の金から支払っていなかったものの多くに対して、今フリッツ夫妻がもう一度支払わなければならないからです。

フリッツ夫妻が販売しているアクセサリは、金製品のような格別高価なものではなく、いわゆる流行のファッション・アクセサリというカテゴリーのものです。したがってそれらは特に見栄えが良くなければなりません。一方、その日フリッツ夫妻のために、客を迎える場所を提供してくれた女性（Gastgeberin）は、アクセサリに含まれる磁石が自分の咳き込み対策にも効果があることを確信しているということです……。

ところで、今回紹介されているようなホームパーティー形式での商品の販売会は日本でも存在しますが、どのくらいの広がりがあるのかは私自身よく分かりません。マスコミを通じてちょっと知っているという程度ですが、放送で紹介されているタッパーウェア（Tupperware）だけでなく、下着、鍋セット、化粧品など多岐に亘っているようです。

また、直販と同様、店舗のない販売形態といえば、ここ10～20年来盛んになったものとして、ドイツのみならず日本においても何と云ってもインターネット通販をあげなければならないでしょう。私が学生だった1970年代には同じ通信販売という形態でも、品揃えやスピードにおいて現在の通販とは大分様子が違っていたと思います。当時のドイツ語の教科書には、ドイツのカタログ通信販売会社としてQuelleとNeckermannの二社が出てきたのを覚えています。一方、当時の日本では、カタログ通信販売に対する一般のイメージとしては、ちょっと怪しげな商売というものではなかったかと思いますので、私自身そのようなカタログ通販がドイツで成り立つことに驚いたものでした。実際に商品を手取るこ

となく購入しますので、そんな印象を持ちました。ところが、時代が変わって今では日本でもカタログ通販も人気がありますし、インターネット通販は多忙な現代人にはとても便利な販売方式として定着しているのを見ると、隔世の感があります。また、当時人気のあった Quelle と Neckermann の二社が数年前に破綻したというニュースを聞きましたが、同じ通販でも淘汰されて行くものもあれば、新しく生まれるものもあるということでしょうか。

ところで、冒頭で紹介されたように、ドイツでは電気掃除機の販売のためにセールスマンが個別訪問をし、販売するということがよく知られているということですが、私の知る限り日本では電気掃除機の個別訪問による販売は一般には行われていないと思います。逆に、日本で特徴的だと思うのは、例えば、物干し竿を直販する竿竹やだだと思います。「たーけやー、さーおだけー♪」の独特の物売り声で知られる移動販売車は、住宅周りの音に敏感なドイツではまず考えられないと思います（他にも拡声器で呼びかけ音を出しながらの商売としては、冬場の灯油販売や季節を問わない廃棄物の回収などがありますが、これらに用事のない人々にとっては、その音声は騒音でしかなく、この上ない迷惑なものに感じてしまいます）。

.K. K.

2017年1月20日

2017年1月 (Nr. 430)

さて、今回は、ドイツのある病院における夜間勤務 (Nachtdienst) が話題になっています。

ノルトライン・ヴェストファーレン州に Werne という街がありますが、その街の守護聖人は Christophorus クリストフォロスです。そこには彼の名前のついた St. Christophorus-Krankenhaus という病院があります。Der heilige Christophorus 聖クリストフォロスは、キリストを背負って川を渡ったと言い伝えられ、「キリストを背負うもの」というこの名前を名乗ることになったとのこと (因みに „tragend” 《背負っている》は、ギリシャ語では „phōrós” というとのこと)。この病院の前の小さな湖のほとりに、子供時代のイエスを腕に載せた水中の聖クリストフォロス像が建てられています。聖クリストフォロスは手に葉のついた杖を持っています。なぜならば、不思議なことに彼の鉄製の杖から何本かの枝が生えてきたという言い伝えがあるからです。

この病院については今回、西部ドイツ放送の女性レポーターが見学し、その夜勤の状況が報告・放送されました。夜間勤務の看護師たちは、遅番の同僚たちから引き継ぎを受け、翌朝には早朝勤務の同僚たちと交替します。こうして、三交替のいずれにおいても患者たちのところにはまた異なった看護師たちがやって来ます。

一般的に夜間勤務はどの職場でも特に骨が折れます。それはバイオリズムに逆らって働かねばならないからです。病院の夜間勤務はさらにきついです。というのは、かつては日中だけ行っていた多くのことが、患者たちができるだけ早くまた退院できるようにすることという目的のために、今や夜間においても行われるからです。病院での時間は、昼夜を問わずできるだけ有効に使わなければならないということです。例え夜間には勤務している看護師や看護人が日中より少ないとしても、有効的な時間活用が求められるということです。

ドイツでは入院期間が平均すると7日間に短縮されたために、一人の夜勤看護師に世話をされる患者の中には、看護師がまだ知らないのを自己紹介しなければならない患者が平均して3または4名はいるということです。その場合、看護師たちは患者たちをファーストネームで呼びます。というのは、患者たちが名字より簡単に覚えられるからです。一方、看護師同士は du で呼び合います。しかしながら、患者から「看護師のビル

ギットさん (Birgit) !」とファーストネームで呼ばれますが、sie が使われて話しかけられるといいます。また、看護師たちは、患者たちとの会話ではしばしば一人称複数形が用いられます。それはちょうど学校の先生が例えば、「今日、私達は序数を勉強します！」と生徒に対して言うのと同じです。

人間は年を取れば取るほど、それだけアルツハイマーや認知症が増えます。病院においても、ベッドから起き上がって、徘徊する認知症患者を相手にしています。彼らを常にすべて監視することはできません。10分ごとに彼らに気を配ることもできません。すると一人の看護師があるアイデアを思いつきました。ドアの取っ手にプラスチックの植木鉢をぶら下げておけば、その植木鉢が落下することにより患者の誰かが部屋から廊下に出たことが気づくだらうというものです。

いくつかの施設では、患者のうち30%もが頭が混乱しており、今自分がどこにいるのかわからなくなっているといいます。特に夜間には事故が頻発する可能性があります。ある女性の場合は、自分があたかも自宅にいるものと思い込み、ベッドから降り、トイレに行こうとします。しかしながら、自宅ではいつもつかまる椅子がそこにはありません。彼女は転倒し、腕をひどく骨折してしまいます。

かつて病院は患者のために行った治療に対して支払いを受けていました。そこでは患者を早く治して再び退院させることに関心がありませんでした。しかしその後、どのような治療がなされたかに従い、支払いが行われるようになって以来、病院は経営を合理化し、常に新しい患者をベッドに受け入れるために治療を可能な限り早く終了させることに努めています。これは、看護師や介護士にとって、いや医師にとっても、彼らが常に新規患者に対して準備をしなければならないこと、そして彼らちが個々の患者たちを以前ほど良く知ることができなくなっていることも意味しています。一方では患者たちの要求が強くなってきており、彼らが新しい看護師に多くのことを最初に説明しなければならない場合、怒るといいます……。

さて、今回登場する聖クリストフォロスについては、キリスト教徒ではない一般の日本人にはなじみの薄い聖人だけに、私も全く知識がありませんでしたが、「キリストを背負うもの」という語源だけでなく、キリスト教各教派によって彼の伝承の内容が異なるということも分かり今回勉強になりました。

また病院では、患者が看護師をファーストネームで呼ぶことが多いというのは意外に思いました。かといって duzen ではなく、siezen というのも興味深い点です(私の今までの知識ではファーストネームで呼び合うならば自動的に duzen だと思い込んでいました)。

さらに看護師が患者たちに対して話しかける会話ではしばしば一人称複数形が用いられるというのも意外な点でした。放送では„...jetzt müssen wir uns mal wieder hinlegen. Es ist Schlafenszeit!“（「さあ、ちょっとまた横になりましょう。消灯（就寝）時間ですよ！」）という例文がありましたが、ドイツ語の先生が生徒に対し„Heute lernen wir die Ordnungszahlen!“（「今日、私達は序数を勉強しましょう！」）と語りかけるのと同じというのも面白い一致だと思います。

ところで、私はこの病院前の See を「湖」と理解しましたが、インターネットで同病院の航空写真を見たところ、日本語で言う「湖」としては小さい印象があります。とはいうものの、沼や池にしては大きい感じも受けました。ドイツ（語）と日本（語）とでは「湖」「沼」「池」の概念が異なるようですので、ドイツ（語）では See の場合でも日本語では必ずしも「湖」と訳すことが適切ではないように思えます。今回は果たして「湖」「沼」「池」のいずれがいいのか、はたまた他の日本語でより適切な語句があるのか、ちょっと心に引っかかっています。

ところで、日本では以前、女性を「看護婦」、男性を「看護士」として区別していましたが、法改正により、2002年以降男女ともに「看護師」で統一されたようです。女性看護師に対するドイツ語は従来通り Krankenschwester だと思いますが、男性看護師に対するドイツ語は、Krankenpfleger（または単に Pfleger）ということになるのでしょうか。ただし、Krankenpfleger にはその女性形 Krankenpflegerin も存在しますので、ドイツでは女性看護師は Krankenpflegerin も併用されているのでしょうか。それとも従来通り伝統的に Krankenschwester がもっぱら使用されているのでしょうか。

今回看護師も話題になっていますので、その数が気になり調べてみました。OECD 資料（„OECD Health Statistics 2015“）によれば、日本とドイツの就業看護師数は以下の通りです（日本では医師や看護師を補助する准看護師を含みます）。ドイツでは准看護師制度があるかどうか分かりませんので、直接比較はできないと思いますが、このデータで比較する限り人口千人当りの看護師数はドイツのほうがやや多いと言えそうです。

国	年次	看護師数	人口千人当りの看護師数	人口（千人）
ドイツ	2013	1,045,000	13.0	80,646
日本	2012	1,344,388	10.5	127,515

また、2017年1月15日付け日本経済新聞において、ある男性看護師が看護師として働く男性が日本では圧倒的に少ない（1992年2.4%、2014年6.8%）ため、苦労や悩みも多いことを訴えていました。その男性看護師は諸課題を解決すべく2014年に全国男性看護師会を立ち上げたということです。因みにドイツでは男性看護師の割合はどのくらいでしょ

うか。これはチェックできませんでしたが、職業の男女差の垣根が日本より低いと思われるドイツでは（個人的な印象ですが）、例えば女性タクシードライバーが日本より多いように、男性看護師も日本よりは多いような気がします。

K. K.